

梁実秋と人文主義

小島 久代

新月派の個々の作家に対する中国に於ける評価と扱いに、最近かなりの変化が見えはじめている。⁽¹⁾一つは、一九五〇年代の文学史には新月派の主要メンバー⁽²⁾として必ず名前が挙げられ批判されていた沈從文が同派からはずされて別項で扱われるようになり、しかも代表作「辺城」⁽³⁾や「從文自伝」⁽⁴⁾が雑誌に再録されていること、また一つは、徐志摩についてであるが、解放後はほぼ全面的に否定され無視され続けてきた彼の逝去五十週年を記念して、最近、趙家璧、沈從文、陸小曼などの追憶文が雑誌に⁽⁵⁾発表され、また近く大部な『志摩選集』⁽⁶⁾が出版される予定であり、『徐志摩詩集』⁽⁷⁾はすでに出版されていることなどがそれである。これら一連の動きを見ると、中国現代文学の評価の基準にかなりの幅がでてきたこと、「派」にとられず作品に則した個別的な作家研究が慎重にやり直されていることが窺える。しかし、新月派の主要メンバーとして挙げられる胡適、羅隆基、梁実秋に対する評価は、文学史等に見る限り依然として厳しい。とくに梁実秋に対しては魯迅の奉った「反動的文人」、「家を失った」「資本家の貧弱な走狗」⁽⁸⁾という評価はいまなお不動である。

一方、最近また「人性論」⁽¹⁰⁾論争がとみに盛んになり、文学について「階級性」の他に「共通の人間性」を認めようとする方向も見える。梁実秋はかつて「文学に階級性はない」「文学は人類共通の普遍的人間性を表現すべきだ」と主張した。それが現在中国でくりひろげられている「人性論」論争の中で、どう評価され、どういふかかわりをもつのか、また、中国でも日本でもいままでほとんど紹介されることのなかった彼の経歴と、彼の文学観の根幹をなす人文主義思

想の形成過程を考察することに筆者の関心がある。さらに、魯迅や革命文学派との論争で明らかにされた論点などについてでもできるだけ見極めたいというのが本稿の目的である。

一

梁実秋は本名を梁治華といい、本籍は浙江省杭県であるが、一九〇一年北京に生まれ、一九二三年アメリカへ留学するまでの幼少青年期を北京で過した生粋の北京人である。私塾、陶氏学堂、京師公立第三小学校で学んだ後、一九一五年清華学校に進み、以後八年間（中・高等科各四年）⁽¹¹⁾を清華園で寄宿舎生活を過した。清華学校は後の清華大学の前身で、一九一一年アメリカが中国から奪った庚子賠償金の半分を教育事業費として中国に返還する政策⁽¹²⁾を採り、その一環として建てられた学校で、国辱の意味をもっていた。入学者は各省の賠償金分担額に比例して採られた。学校の制度も特殊で、米留留学のための予備学校であった。馬国驥、林語堂、孟憲承、巢望霖やアメリカ人教師によって英語で講義される午前中の授業は、アメリカの大学同様に教師の指定する多くの閲読資料を読んでおかなければついて行けないほどハードで充実したカリキュラムであったのに比べ、午後は華人・進士など肩書きだけで採用された時代遅れの教師陣による授業であったため、学生の心を魅きつけるものは少く、中には北京大学へ聴講に行く学生もいた。だが梁実秋は、外国人や外国文化を崇拜し自国の文化を蔑視する清華学校内の風潮には反撥を感じ、一時は学内の孔教会の活動に参加して貧民補習クラスや労働者補習クラスで教えたこともあるほどで、また国語の教師徐鏡澄⁽¹³⁾や梁啓超⁽¹⁴⁾の講演に深い影響を受けて中国文学に対する興味も喚起されたという。のちに、渡米後アメリカ学生の中国人蔑視の内容を含んだ詩に対し、聞一多と共同で愛国心に溢れた詩を書いて堂々と応酬したり、国家主義的組織「大江会」⁽¹⁵⁾に加わったことにも、清華学校という特殊な環境の中で鬱積していた民族主義と愛国心の発露の側面が見える。

五四運動の時は中等科四年（十八歳）で、デモにも参加した。当時の清華学生のリーダーは、陳長桐でのちにコロラド大学においても先輩であった。五四運動に続いて学内では連続三回にわたる校長排斥運動が起きている。これは学生の夜間集会等を暴力で弾圧しようとした学校当局に対し、自治を要求する抵抗運動であった。この時のリーダーは羅隆基で、梁実秋も最後の数年間を評議員として、この「清華革命」と呼ばれた学生の自治要求運動に直接かわっている。また、清華には⁽¹⁷⁾《清華週刊》という定期刊行物があったが、梁実秋は卒業の前年（一九二二）頃から友人の呉景超と二人でその編集と社論執筆を毎週担当していた。社論は学校の行政を批判したものが多く、彼は校長の庸弱無能を攻撃して校長の癪気に触れ、あやうく処分される所を呉景超が救ってくれたというエピソードもある、この頃の経験が人との論争を好む気風を助長し、また原稿書きや編集の仕事もおぼえさせてくれたという。

文芸に関心をもち習作を始めたのはこれより早く、一九一九年高等科へ進級した頃からで、最初は友人の顧毓琇（一樵）、張忠紱、翟桓らと「小説研究社」を作って翻訳などを手がけていた。のちに二年上級の聞一多と知り合い「清華文学社」と改名し、メンバーも朱湘、孫大雨、聞一多、謝文炳、饒子離（孟侃）、楊子惠などが新たに加わった。このうち、聞一多、饒子離がのちの雑誌《新月》創刊号（一九二八年三月）の編集者として名前を連ねている三人のうち二人（他の一は徐志摩）であり、五人の共同編集者の一人に梁実秋も加わっていること、また、朱湘、孫大雨も「新月」派詩人として名を成したことから見て、「清華文学社」同人が「新月」構成メンバーの文芸面における若手の成員として、かなり大きな比重を占めていることは注目に価する。また、政治評論面でも、羅隆基、潘光旦が主要メンバーとして論陣を張り、顧一樵、呉景超らも投稿していることを見ると、従来ややもすれば「現代評論」、「詩刊」とのつながりのみが強調されがちであったが、「新月」派の人脈、ひいては《新月》の性格を考える上で、この点は再考を要しよう。「清華文学社」のころ、彼は主に新詩、雑感を書いて《晨報》副刊、《晨報副鐫》に投稿している。その中で「荷花池

畔」(詩)は、のちに《創造季刊》(一九二三、三)に発表されるが、彼が「創造社」と接触をもつようになったのは、次のようないきさつからであった。当時、俞平伯の「冬夜」と康白情の「草児」という散文詩に対してその通俗的傾向に不満を抱き、聞一多は「冬夜評論」、梁実秋は「草児評論」を書いて批評し《晨报》副刊に投稿したが没になり、実秋の父親から資金を出してもらって一九二二年『冬夜草児評論』として自費出版した。この評論が郭沫若の賞讃を得たことから、初期創造社同人とのつき合いが始まる。だが、創造社同人の頹廢的な生活態度には辟易していたようで、とりわけ郁達夫に北京の売笑窟の案内を頼まれて困ったエピソードは、⁽¹⁹⁾日本の自然主義の影響を受け、民族的屈辱感を性の悩みの大胆な表現に託した「沈淪」を書いて、一躍注目を集めた日本留学帰りのデカダンな文人と、家庭や清華において古風で厳格な躰を受け、のちに清教徒的なバビッドに魅かれていく梁実秋との氣質の違いを表わしている。これがのちに彼に「文人有行」を書かせる契機となったようだ。

南京高等師範学校出身の胡昭佐(夢華)、吳宓(雨僧)、梅光迪(廸生)、胡先驕(歩青)らと知り合ったのもこの頃である。吳宓らはバビッドに師事した先輩で、彼らが《学衡》に発表したバビッドの論文の訳は、⁽²⁰⁾のちに梁実秋の編集で『白璧徳与人文主義』として新月社から一九二七年に出版されている。

清華時代の梁実秋は、頹廢的傾向には違和感を抱いていたにせよ、創造社とくに郭沫若の「女神」の影響を受けており、詩や評論はロマン主義的傾向を帯びている。これは、渡米後のコロラド大学在学中まで継続する。

一九二三年六月十七日清華学校を卒業し、八月上海から米国留学の途につく。アメリカで最初に入学したのはコロラド大学で、在学中に書かれた新体詩、詩評、書簡、文学評論などは、ほとんどが《創造季刊》、《創造週報》に発表された。「拝倫与浪漫主義」もこの頃(末尾に「癸亥十二月初八美国柯泉」とあり、一九二四年初)書いたものであるが、一九二六年になってはじめて《創造月刊》(第一卷第三、四期)に発表されている。⁽²¹⁾この時期までの彼の文学観を知る

上で「拝倫与浪漫主義」は代表的評論であるので、少し内容を紹介しよう。

まず、ロマン主義の特徴として、「(一)自我表現の自由、(二)詩のスタイルの自由、(三)詩のテーマの自由」をあげ、「ロマン主義の神髄は、つまり『解放』の二字である」と述べる。そして、古典主義が理智的、常識的、日常生活の経験的事実と情緒を重んじるのに対し、ロマン主義は想像、美感、新鮮奇異を重んじ、自然と自我を調和した一体と見做し、主観的感情と客観的自然とが融合して一つになることを求めるのだと述べ、アーノルドとシェリーの詩を比較してそれぞれの特徴を指摘する。また、

ルソーはフランス革命の先駆者で、全ヨーロッパロマン運動の始祖である。ルソーの使命は人類を精神上の桎梏から解放し、個人に自由に発展する自由をもたせしめることであつた。ロマン主義はこのような精神を文学の中に表現したにすぎない

と述べ、ルソーを高く評価している。バイロンについてはつぎのように言う。

バイロンが自由を愛するのは、当然ルソーの影響を受けているが、ルソーの思想と全く同じではない。ルソーの自由論は理智の分析に基づいているが、バイロンの自由論は感情の直覚に基づいている。

バイロンの詩歌は全人類の至聖至神を代表し、天地をも揺がす叫びである。ロマン詩人はすべて自我の表現を重んじるが、自我の範囲の広さはバイロンより甚だしきはない。バイロンのような精神は大かたゲーテと並び称されるものだ。

彼はバイロンをゲーテと比肩しうるとまで称讃する一方で、アーノルドを古典主義の典型として挙げ、常識的であると退けている。この評論では精神の解放と自由を主張する梁実秋の若い情熱は十分に感得できるものの、新古典主義についての言及がなく、ロマン主義が古典主義に反対して興ったと述べている点など、その後の彼の評論に較べるとヨ

ヨーロッパ文芸思潮に関する理解の浅さが目立つが、ここでは彼のロマン主義に対する共感と情熱を確認すればそれでよい。

二

一九二四年秋にハーバード大学研究院に入り、彼の文学観をロマン主義から古典主義へと百八十度転換させるほど影響を受けたバビッド教授に師事する。バビッドは当時「十六世紀以後の文芸批評」の講義をしていた。彼はハーバード大学のフランス文学科の教授であつたが、モアとともに今世紀初頭のアメリカにおけるニュー・ヒューマニズム運動の旗手としての役割を果たした人物である。

ニュー・ヒューマニズムの運動は、ロマン主義と科学を攻撃の対象としたことはよく知られているが、それは「両者のいずれもが人間を人間としての正しい位置に置かないからで、ロマン主義は人間を栄光の座につけ、それを人間以上のものにしてしまふ、反対に科学は人間を単なる動物と見做すことによって、人間以下のものにしてしまふ」⁽²⁴⁾と考へたからであり、そして「バビッドの攻撃したのは、これら二つの陣営のそれぞれの源流と見做されるルソーとベイコンであり、同時にそれらの現代版としてのモダニズムとか、ダーヴィン・アインシュタインであり、自然主義の作家たち」⁽²⁵⁾であつたのである。

ここで注意しなければならないのは、ヒューマニズム（人文主義）とヒューマニテリアニズム（人道主義）の違いであり、両者を混同してはならない。人道主義は適度と制限を欠く知識及び同情の拡張を極力主張し、人類全体の向上、四海同胞観を説くのに対し、人文主義は一個人の完成に重きを置き、同情をも許容するが、教養と訓練によって抑制ある自由と同情的選択を行使することを主張するのである。バビッドは「人道主義の二典型」⁽²⁶⁾として、自然主義と人道主

義が結びついて形成された二典型——科学的自然主義及び人道主義と、感傷的自然主義及び人道主義——をあげ、その源流はバイコンとルソーにあると指摘する。そして彼は、

バイコン派が分量及び力学の法則を以て人の法則となし、ルソー派が社会に対するに愛憐をもって宗教的抑制に代えようとする場合に文化の危機が生ずる⁽²⁷⁾

と述べ、現代社会が自然科学の進歩の観念とルソーの自由の観念との結びつきにより、人の法則が忘れられることに危機感を示すのである。梁実秋は「白璧徳及其人文主義」⁽²⁸⁾で、人文主義について、ノーマン・フォスターの“Towards Standards”を引用して「人文主義者は、人間に“完全”、“均衡”、“正常態”、“理性”、“倫理”、“抑制”、“自我の拡張に反対し、普遍的理性に従う”ことを求め、また、人間性を固定した普遍的なものであると見做し、文学の任務はこの根本的な人間性を描くことにあると考えた」と述べている。

バビッドの代表的著作『ニュー・ラオコオン』⁽²⁹⁾は、近世ドイツ文学批評家として著名なレッシングの『ラオコオン』(一七六六年)に擬して書かれた文芸思潮論であるが、レッシングは、アリストートル(B・C・三八四—三二二年)の『詩学』を文学批評の絶対的標準として立て、真に古典的と会得したものと擬古典的とを厳しく区別し、新古典時代の詩画混淆観を批判し、詩は時間に音声を表わし、絵画は空間に形態と色彩を用いる、また、詩は連続するもの絵画は共存するものを取扱うとして、両者の形式上の区別を明確にした。それに対してバビッドは、真に古典的なものとロマンティックを区別し、ロマン派は瞑想によって文学、音楽、絵画など諸芸術の情緒的、主観的な混淆を試み、詞彩絵画⁽³⁰⁾、標題音楽、色彩聴覚を産み出したとして、近代芸術すべてにわたるロマン主義傾向を批判する。そして、文学者の緊急な仕事として、「ルソー主義において種々の形で現れた智性及び智性以上のものを軽視する傾向に反対し、また分析的鋭敏と理智的勇気を科学者に一任してしまつてはならない、また文学批評家は明瞭な、男性的な、強剛な差別をい

ま一度名誉の位置に立たせること」を主張したのである。

梁実秋がバビッドの講義を選んだのは、元来は挑戦者の心情からであったが、バビッドの学識の渊博さに驚嘆し、「私は自分の浅学を自覚しはじめ、学問思想の領域の博さ大さ精しさ深さを認識しはじめた。続いて私は次第に彼の思想体系を把握し、次第にその人文思想の現代における重要性がわかってきた。」⁽³³⁾と述べている。一年後、彼がバビッド教授に提出した論文は「ワイルド及びその唯美主義」で、彼はこれを機にそれまでのロマン主義的傾向を清算しようと考えた。つまり、この論文は彼が人文主義の立場に立って書いた最初のもので、ワイルドの唯美主義に対する批判であった。

「現代中国文学之浪漫的趨勢」⁽³⁴⁾は、バビッドの『ニュー・ラオコオン』に擬して書かれ、いわばバビッドから学んだ人文主義の文学観に立って、五四以後の中国新文学を全面的に批判した重要な評論である。中国新文学の現状を、彼は次の四点からロマン主義的傾向にあると指摘する。

- (一) 外国の影響を受けている
 - (二) 感情を崇拜し、理性を軽視する
 - (三) 人生に対する態度が印象的である。
 - (四) 自然に返れと主張し独創を重んじる。
- 以下要点をまとめて紹介してみよう。

(一) 白話運動はアメリカのイマジズムの主張を輸入したものであり、小説、戯曲、翻訳、文学紹介のいずれも外国の影響を受けている。とりわけ、外国の文学観の輸入がもたらした影響は甚大で、以前の文学観は「文以載道」であったが、いまや文学は芸術になり、紅樓夢や孟姜女唱本までも文学と見做すようになった。いまや我々は二つの基

準——中国のと外国の——を持っている。ロマン主義者のやり方は、第一に中国固有の基準を打倒することであるが、それはいまだかつて打倒されたことはない。第二に新しい基準を建設することであるが、この基準も建設されたことがない、ロマン主義者の唯一の基準は、つまり「基準なし」ということである。だから新文学運動は全体として見れば、「ロマンの混乱」である。

(二)現代の中国文学には抒情主義が瀰漫している。愛情詩の流行がそれである。感情に理性の選択が加えられなければ、その結果①頹廢主義②偽理想主義が生れる。頹廢主義の文学は声色肉欲に耽けり文学を色相みめかたちの域内にとじ込めてしまい、自分と他人の衝動をかき立てることを能事としている。偽理想主義者は、極度な感情の高まりの下で、精神が錯乱し、一方では現世の事実を顧ることができず、他方では物質を超えた実在の世界も会得しえない。これが文学に表現されると、狂人の狂語、つまり囁語の如き、空中樓閣の如きものとなる。感情が抑制されなければ、作者の人生観は必ず「人道主義」の色彩を帯びてくる。人道主義の出発点は「同情心」であり、よりの確には「普遍的同情心」というべきである。最近新詩に「人力車夫派」が生れた。普遍的同情心は人力車夫から農夫、石工、鍛冶屋、轎かき、売笑婦にまで拡げられ、また社会から世界に推し広められて、所謂「弱小民族の文学」、「被圧迫民族の文学」、「反戦文学」が現われている。

(三)印象主義はロマン主義の末流で、その人生観はベルグソンの「流動の哲学」に基づいている。中国文学はいまやこの印象主義に支配されている。「小詩」に「書翰体」「日記体」を用いた印象小説、「遊記」の流行がそれであり、また鑑賞批評、印象批評に印象主義が最も効果的に用いられている。その原理は理性の判断力をくつがえし、基準の存在を否認することであり、その影響は甚大で創作文学全体の趣向を移しうる。

(四)「自然に返る」ことと「独創を重んじる」こととは互いに矛盾するが、矛盾の衝突こそがロマン主義の一大特色

で、規律がない。その代表者がルソーである。中国の新文学運動で「自然に返れ」という主張は、児童文学と歌謡の採集の流行に表われている。前者は、現実生活から幻想へ、大人から子供へ、文明社会から原始社会への逃避であり、後者は中国歴来 of 因襲的文学に対する一つの反抗である。我々は「自然に返れ」と「独創」に賛成してもよい。だが我々が主張するのは、人間性を中心とした自然であり、理性に導かれた独創である。

この評論文は新文学全般に見られるロマン主義的傾向を西洋古典主義を擁護する人文主義的立場から批評しているが、なかでも主な批判の鋒先は(一)に向けられていると思われる。①の頽廃主義は郁達夫を、②の偽理想主義、人道主義は魯迅⁽³⁵⁾、周作人等を指していることは容易に想像がつく、つまり、創造社、語絲派とともに批判の射程内に入れており、「人力車夫派」批判では、感情に流され理性の選択を経ていない「普遍的同情心」と「平等」の観点を人道主義として退けているが、その見解に、のちの革命文学派批判の兆が見られる。バビッドが『ニュー・ラオコオン』でアメリカ文学に見られるロマン主義のもたらした悪しき影響を理論的に批判したように、梁実秋は現代中国文学をロマン主義的混乱の傾向にあると見定め、具体的表出としての印象主義、抒情主義、人道主義、自然主義的傾向を指摘し、理性の指導の下で、人間性に基づいた文学を書けと主張したのである。『ニュー・ラオコオン』の影響は論旨全般に見られるが、特に、児童文学をロマン主義の一典型と見做す指摘などは前者の影響がそのまま表われている。彼はこの評論文によって人文主義的思想と立場による文学批評家としての立脚点を築いたと言える。

三

人文主義者としての立場を固めた彼は、この後精力的な評論活動を展開する。その過程で魯迅をはじめとする多くの人々と論争をかわすが、本論末に付す「梁実秋文学論争略年譜」は関係資料の概要を示すものである。以下その中から

彼の人文主義的思想を考察する上で重要な評論をいくつかとりあげ、その内容を検討してみたい。

二七年に書かれた「文学批評辯」は、印象主義批評と科学的批評に対する批判で、上文の「現代中国文学之浪漫的趨勢」(以下「浪漫的趨勢」と略記)の(三)において印象主義について述べたのを、ここでは科学主義にも拮据して論じている。これはバビッドに見られる科学的自然主義及び人道主義批判と通じるもので、梁実秋の論はそれを忠実に踏襲している。璧華氏は「梁実秋が印象主義的批評に反対するのは、実はロマン主義に対する憎悪に根源がある」として、「浪漫的趨勢」の「人道主義」——「人力車夫派」、「弱小民族の文学」への言及を引いて、「印象主義批評」は「革命文学」の暗喩であると解釈⁽³⁶⁾しているが、筆者はむしろ「科学主義的批評」の方がマルクス主義文芸批評につながるものとして想定されていたのではないかと考える。なぜならば、先きの評論でも「印象主義」と「人道主義」とは区別されているし、「革命文学」の暗喩という見解はいささか牽強附会の気味がある。

「盧梭論女子教育」は璧華氏によって初めてその全文が紹介⁽³⁷⁾された。これはルソーが女子教育を論ずるに当り「男と女とは性質も体格も違うから、彼らの教育も同じではあり得ない」と「自然の不平等」を肯定した論だけが見るべきものだとする見解を述べたものである。この一文と「文学批評辯」が魯迅との論戦の直接のきつかけとなるのだが、ここでは論争の具体的などころまで触れる余裕がない。ただ、魯迅の指摘⁽³⁸⁾するように、「真の自然」と「徐々に人為がつみかさねられて自然のようになったもの」との区別がなかなか容易につかないから「人為的な男女不平等」を「自然の不平等」として容認してしまった点に、伝統的な儒教思想に基づいた人文主義者梁実秋の女性観の保守性と限界が明らかである。

「文学的紀律」は、徐志摩の「新月的態度」とともに《新月》創刊号に掲載された。彼としては、四・一二クーデター後の混乱した社会情勢や文学界にあって、ただ漠然と「健康」と「尊厳」を打ち出すだけでは満足しきれないものがある。

ったようだ。当時の氣持を彼は後年次のように述べている、

「我々の態度」の一文は、志摩の筆になるもので、我々の共同信念を包括したようなものだが、非常にあいまいで、ただ、「健康」と「尊厳」の二つを掲げたにすぎなかった。私個人としては、私の当時の文芸思想は伝統的な穩健な一派に傾いていた。私は五四運動の革新的主張を受け入れてはいたが、ハーバード大学教授のバビッドの影響も頗る大きく、ゆき過ぎたロマンティックな傾向に決して同情してはいなかった。同時に当時上海で最もやかましくさわがれていた「プロ文学運動」に対しても同意しなかった。私自身は左右両方の中間に居ると思っていた。私はプロ文学運動を批判したし、魯迅も批判した。これらの文章は新月に発表されたが、それは私個人の意見にすぎず。私は決して新月を代表していたわけではない。⁽³⁹⁾

この評論でも、彼は古典主義の立場から新古典派、ロマン派の両者を排するが、むしろ批判の鋒先はロマン派の方につよく向けられている。つまり、新古典派のたてた文学の法則（「適當律」とか「戯曲の三一律」など）を覆すに當って、基準・秩序・理性・抑制の精神もことごとく打破してしまい、「天才の獨創」、「想像の自由」を唱えており、これが今日の文学に混乱をもたらしていると指摘する。梁実秋の考えでは、「文学に法則はいらぬが、基準はなくてはならない。文学に従事する者は、この基準に対して相当の關係をもたねばならない。それが文学の規律の問題であるとして、(一)文学の態度、(二)文学の力、(三)文学における想像、(四)文学の形式の四点について、新古典派の法則のような外在的權威としてでなく、内在的制裁としての規律を文学の健康の為に主張している。

この一文について、新村徹氏は「これらは革命文学派に向けられたというよりも、ロマン主義の行きすぎに対する反撥の側面の方がむしろ強かったのではないか」と指摘する。⁽⁴⁰⁾新村氏が傍証としてあげる「文人有行」については、彼自身も認めている通り、確かにロマン主義の頹廢的傾向に対しての批判であるが、彼が「ロマン主義」という場合には、⁽⁴¹⁾

「浪漫的趨勢」でとり上げているように、五四運動期以降の新文学すべてにわたるロマン主義的傾向を指している。であり、「普遍的同情心」と「平等」を唱える人道主義もロマン主義の典型としてとらえ、「人力車夫派」「弱小民族の文学」「被压迫民族の文学」「反戦文学」をすべて退けているのである。つまりは、革命文学派も「人力車夫派」の延長線上に位置づけて見ていたのに違いない。この一文は、すなわち、「浪漫的趨勢」で指摘した文学界の混乱に対応するための彼なりの処分箋を、新文学全体を鳥瞰する立場に立って論じたものと言えよう。⁽⁴²⁾

四

一九二八年以後の革命文学論は、四・一二クーデターを経て、新たな段階へ入り、《創造月刊》《文化批判》《太陽月刊》等に成仿吾、李初梨、蔣光慈らの革命文学論が次々と発表された。丸山昇氏は当時の状況を「国民革命挫折を体験した二八年の革命文学論は、国民革命とのつながりを失った、あるいは自ら切り捨てたことによって、百パーセント階級論に立った文学論として出現したと言えるのである」⁽⁴³⁾と述べているが、そのような状況下で、梁実秋は「文学与革命」、「文学是有階級性的嗎」などを書いて、人文主義者の立場と思想をより鮮明にして行くのである。この二篇は彼が「革命の文学」、「無産階級の文学」に対して「人類共通の普遍的人間性に基づく文学」を主張して正面から革命文学派や魯迅に反対した資産階級反動派の文学観、人性論として、文学史、人性論争にしばしば引用されている。

「文学与革命」では、文学と革命の関係について次のように述べる。

「文学は永遠のものであり広大なものであるが、革命は一時的なものである」として、ただ「革命時期の文学」があるだけであると主張する。また、「偉大な文学は固定した普遍的人間性に基づく文学で、人の心の奥深くから流れ出る感情こそよい文学である。人間性は文学を測る唯一の基準である」と述べ、時代と国土を超えた「普遍的人間性」こそ文

学を測る基準であるということを強く主張する。また、革命文学派が「大多数の文学」を唱えたのに対し、「大多数には文学はない、文学は大多数のものではない。なぜならばロマン主義の文学は、一般に革命の文学だと考えられるが、ロマン主義の文学は個人主義を尊奉するのである。だから、大多数の文学を唱える人は文学についても革命についても認識が不徹底である。」これには第一に「文学は適切な少数者のために書かれるものだ」という人文主義の「選択」の思想が色濃く見られること、第二に、彼の革命観が過去の易姓革命やロマン主義文学運動理解を通して形成されたきわめて観念的なものであって、「天才論」「個人主義の尊重」「反抗の精神」……のレベルでしか革命をとらえられなかったということの二点が指摘できる。一方、革命文学派や魯迅はロシア革命に曙光を見出し、ソ連の文芸理論を学び中国の現実と切結ぶ中で、革命をとらえ「大多数のための文学」を模索していたのである。馮乃超は「冷靜的頭腦」で次のように反論する。

「革命は決して一、二の天才が起すものではないし、革命の背後には社会の要求を満足させられなくなった老朽化した社会制度がある」のであり、文学の階級性については、「階級社会では、階級の独占性が生活一般の上に適用される」として、「落花秋月」に感興を覚える貴族の人間性と、一日中暗闇に閉じ込められている労働者とは何の関係もない」と述べ、「生活感覚、美意識、人間性の傾向も階級の制約を受ける」から、そこから産み出される文学も内容によって有閑階級の文学、資産階級の文学、反革命の文学になると断言する。

つまり、文学を階級という基準から価値判断する文学観であるため、梁実秋の人間性論とは真向うから対立するわけである。これを受けて梁実秋は再び「文学是有階級性的嗎」を書いて反論する。梁実秋の主張は次のようになる。

(一)人類は階級の別はなく貧富の差があるだけである。これは優勝劣敗の法則の結果に他ならない。資産は個人の頭脳才力によってつくられる。頭脳才力は人によって平等ではあり得ないから、人の生活も当然平等にはならない。真

に頭脳才力のある人は、暫らくは貧苦をがまんしていても、いつまでも埋れていることはない。

(二)人は階級を超えた共通の人間性をもっている。資本家も労働者も人間性は変りがない。生老病死の無常、愛の要求、憐憫と恐怖の情緒、恋愛、山水草木の美を歌うことに階級の別はない。

(三)作家の出身階級と作品とは無関係である。(トルストイ、マルクス、ジョンソン博士を例に挙げて論証する)

(四)よい作品は永遠に少数のものの独占物であり、大多数は永遠に愚かで文学とは無縁である。鑑賞力の有無は階級とは関係がない。貴族や資本家でも文学の何たるかを知らぬ者は多いし、無産者でも文学を鑑賞する者は多い。これに対し、魯迅は文学には階級性があると主張した。「硬訳」与「文学的階級性」では、

文学も人間を借りなければ、性を示す方法はない、そして人間を使うとなれば、それは階級社会においてのことである。つまりその属する階級性から逸脱することは絶対にできない。何も束縛を加えるのではなくて、実は必然的にそうなるのだ。……もしも最も普遍的な人間性を表現する文学が最高のものだというならば、最も普遍的な動物性―栄養、呼吸、運動、生殖―を表現する文学あるいは運動をのぞいて、生物を表現する文学が更にその上に位すべきである。……ただ、文学には階級性がある、階級社会のなかでは、文学者が自分は自由だと思い、階級を超えていると思っても、結局は無意識に自分の属する階級の階級意識に支配されているのであって、その創作は決して他の階級の文化ではありえない。

と述べて、階級社会にあっては人はその階級性から逸脱することはできないとして、梁実秋の普遍的人間性論を痛烈に諷刺するのである。

しかし、最近の「人性論」論争では、魯迅は文学に「階級性」があるだけではないと考えていたという指摘がなされている。⁽⁴⁵⁾問題となっている文章は、魯迅の「文学的階級性」(一九二八年八月)であり、そこで魯迅は、林癸未夫著の

『文学上の個人性と階級性』についての読者の質問に対して

私自身はこう考えます。もし性格、感情等がみな「経済に支配される」という説によるならば、それらは必ずみな階級性を帯びるのだと。ただし、「みな帯びる」のであって、「それだけである」ではありません。

と述べている個所を引いて、彼は決して共通の人間性を否定していたわけではなく、共通の人間性を否定する意見に対しては明確に異った見解を述べていたとする。そうだとすれば、梁実秋は文学に共通の人間性のみを主張して階級性を否定したのに対し、革命文学派は文学の階級性のみを主張し共通の人間性の存することを否定した、だが魯迅は文学に階級性と共通の人間性の両方を認めていたということになる。梁実秋のいっていた強固な人文主義文学観からすれば、革命文学派と相容れないことはもとより、魯迅のような柔軟な主張とも対立せざるをえなかったことは当然であろう。そしてまた、革命文学につながる中国現代文学の中で、梁実秋の主張はこれまでタブー視され、無視されてきたのも無理からぬところである。しかし、彼の提起した「共通の人間性」を描いて行こうという方向は、必ずしも同じ思想的基盤から出たのではないにしても、文革以後の今日の中国文学界に表われた一つの重要な傾向であるように思う。例えば、劉心武の小説⁽⁴⁶⁾などにはその傾向が見られるのではないだろうか。上述のごとく、現代文学の再評価がはじまった中国で、「人性論」論争あるいは文学史の見直しの中で、この問題また梁実秋その人がどう扱われていくのか、興味深いことである。

梁実秋文学論争略年譜

発表年月日	論者	論文名	掲載誌
一九二・六・二十五	梁実秋	現代中国文学之浪漫的趨勢	《晨報副鐫》
一九二七・夏	梁実秋	文学批評辯	《復旦旬刊》創刊号
一九二七・十一	梁実秋	盧梭論女子教育	《語絲》四卷四期
一九二八・一・七	魯迅	盧梭和胃口（一九二七・十二・二十一執筆）	《語絲》四卷五期
一九二八・一・十四	魯迅	文学和出汗（一九二七・十二・二十三執筆）	《新月》一卷一期
一九二八・三・十	徐志摩	新月的態度	《新月》一卷一期
一九二八・三・十	梁実秋	文学的紀律	《新月》一卷二期
一九二八・三・二十五	梁実秋	關於盧梭	《申報》
一九二八・四・十	梁実秋	文人有行	《新月》一卷二期
一九二八・四・二十二	魯迅	頭（一九二八・四・十執筆）	《語絲》四卷二十七期
一九二八・六・十	梁実秋	文学与革命	《新月》一卷四期
一九二八・七・十	彭康	什麼是健康与尊嚴（一九二八・五・十四執筆）	《創造月刊》一卷十二期
一九二八・八・十	馮乃超	冷靜的頭腦（一九二八・六・二十一執筆）	《創造月刊》二卷一期
一九二八・八・十七	紅石	——評駁梁実秋の「文学与革命」——	《漢口新民報副刊》
一九二八・十一・十	梁実秋	論文人之行	《新月》一卷九期
一九二九・七・十	梁実秋	文人之行	《新月》二卷五期
		論批評的態度	

一九二九・九・十

梁実秋

文学是有階級性的嗎？

一九二九・九・十

梁実秋

論魯迅先生的「硬訳」

一九二九・十・十

梁実秋

「不滿於現状、便怎樣呢？」

一九二九・十二

葉靈鳳

梁実秋（創作）

一九三〇・一・一

潦西

文学家兼政治家（一九二九・十一・十執筆）

一九三〇・一・一

魯迅

新月批評家の任務

一九三〇・二・十

馮乃超

文学理論講座（第二回）階級社会の芸術

一九三〇・三・一

魯迅

文芸の大衆化（一九三〇・二・二五執筆）

一九三〇・三

魯迅

「硬訳」与「文学的階級性」

一九三〇・三月以降

梁実秋

答魯迅先生

一九三〇・三月以降

梁実秋

無産階級文学

一九三〇・三月以降

梁実秋

資本家走狗

一九三〇・五・一

成文英

諷刺文学与社会改革

一九三〇・五・一

韓侍桁

關於「看貨色」の問題

一九三〇・五・一

魯迅

好政府主義（一九三〇・四・十七執筆）

一九三〇・五・一

圭本

關於「爭自由」

一九三〇・五・一

魯迅

「喪家的」「資本家の走狗」（一九三〇・四・十九執筆）

一九三〇・五・一

刈刺

關於梁実秋自称無産階級一点更正

一九三〇・五・一

靈声

五一紀念中兩只「狗的跳舞」——王独清与梁実秋——

一九三〇・五月以降

梁実秋

「普羅文学」一斑

《新月》二卷六七期

《新月》二卷六・七期

《新月》二卷八期

《現代小説》三卷三期

《萌芽》一卷一期

《萌芽》一卷一期

《拓荒者》二期

《大衆文芸》二卷三期

《萌芽》一卷三期

《新月》二卷九期

《新月》二卷九期

《新月》二卷九期

《萌芽》一卷五期

《萌芽》一卷五期

《萌芽》一卷五期

《萌芽》一卷五期

《萌芽》一卷五期

《五一特刊》

《新月》二卷十一期

一九三〇・五月以降	梁実秋	思想自由	《新月》二卷十一期
一九三〇・五・十五	烈英	文明是建築在資産制度之上嗎？ ——評梁実秋底“文学是有階級性的嗎？”之第一節——	《新思潮》六期
一九三〇・六	梁実秋	文学与大衆	《新月》二卷十二期
一九三〇・六	梁実秋	造謠的芸術	《新月》二卷十二期
一九三一・四・十(?)	梁実秋	所謂「文芸政策」者	《新月》三卷三期
一九三一・四・十(?)	梁実秋	主与奴	《新月》三卷三期
一九三一・四・十(?)	梁実秋	資本家和芸術品	《新月》三卷三期
一九三一・四・二十五	魯迅	中国無産階級革命文学和前驅的血	《前哨》
一九三一・四	魯迅	黑暗中国的文芸界的現状 ——為美国《新羣衆》作——	
一九三一・四・二十四	魯迅	「三閑集」序言	
一九三一・四・三〇	魯迅	「二心集」序言	

注

(1) 田仲濟・孫昌熙主編『中国現代文学史』(山東人民出版社 一九七九・八 山東)の緒論一六ページに「新月社も似た点がある。聞一多、卡之琳、朱湘、沈從文のような作家は、一度は新月のメンバーであったり、新月社の活動に従ってそれに参加したこともあるが、彼らの作品も同様に逆流と見做すことはできない。反対に、かつては程度の差こそあれ進歩的作用を果した。」(傍点は筆者)とある。

(2) 劉綏松著『中国新文学史初稿』(上)(作家出版社 一九五六 北京)では「その主宰者は胡適、徐志摩、梁実秋、沈從文など」、また丁易著『中国現代文学史略』(作家出版社 一九五五 北京)では、「主な人物は“現代評論派”にもとからいた胡

適、徐志摩、陳西滢をのぞいて、さらに梁実秋、葉公超、沈從文などの輩を糾合した」とある。

- (3) 一九七九年版の劉綬松著『中国新文学史初稿』(上)(人民文学出版社 北京)では、「その主宰者は胡適、徐志摩、梁実秋など」と変り、また九院校編『中国現代文学史』(江蘇人民出版社 一九七九・八)でも、胡適、羅隆基、梁実秋、徐志摩のみを挙げる。(1)に引いた『中国現代文学史』の本文では、新月派の主要メンバーとして胡適、徐志摩、梁実秋、陳西滢のみを挙げ、沈從文については別項で述べている。二六一ページ。

- (4) 一九三四年作。『小説界』文学叢刊創刊号(上海文芸出版社 一九八一・五)に再録される。

- (5) 一九三一年作。『新文学史料』(人民文学出版社)一九八〇年第三、四期、一九八一年一期に再録。

- (6) 『新文学史料』一九八一年第四期に、趙家璧「回憶徐志摩『志摩全集』——紀念詩人逝世五十週年」、陸小曼「遺文編就答君心——記『志摩全集』編排經過」、陳從周「記徐志摩」、沈從文「友情」、朱自清「徐志摩死之情形」、沈松泉「詩人徐志摩軼事」が収録されている。

- (7) (8) いずれも(6)の趙家璧の回想記による。『徐志摩詩集』は四川人民出版社から最近出版されたというのが出版年月は不明。『志摩選集』も人民文学出版社から近く出版される予定という。

- (9) 魯迅「喪家的」「資本家的走狗」『二心集』所収、

- (10) 白燁整理「三十年代人性論争的情况」(『文学評論』一九八一年第一期)は、一九五〇年代から現在までの論争をまとめてくれているので便利である。他に倪墨炎「學習魯迅關於人性的論述」(『文芸報』一九八一年二十号)、張炯「關於人性、人情及其它」(『文学評論』一九八一年第六期)など多数ある。

- (11) 清華大学校史編写組編著『清華大学校史稿』(中華書局出版 一九八一・二 北京)によれば、一九二一年四月に清華学堂開校とある。

- (12)、(11)に引く書に拠る。

- (13) 「我的一位国文老師」「秋室雜文」(文芸書屋 一九六八 香港)所収。

(14) 「記梁任公先生的一次演講」『秋室雜文』所収。

(15) 梁実秋著『談聞一多』(伝記文学出版社 一九六七 台湾)によれば、羅隆基、何浩若、時昭瀛、吳景超、聞一多、梁実秋を中心に国家主義的組織「大江会」を組織する。会員は三十～五十名を擁し、『大江季刊』(上海泰東公司)二期を出す(一九二四年～二五年頃と思われる)。「大江会」は政党でも革命党でもなかったために帰国後解散する。大江会の主張は次の三項目にまとめられる。

(一) 国家の危急存亡に際し、世界大同或いは国際主義的崇高な理想を恣に語らず、積極的に国家主義(Nationalism)を提唱する。

(二) 国内軍閥の専横恣肆に鑑み、自由民主の体制を励行し、人権を擁護する。

(三) 国内経済の落後・人民の貧困に鑑み、国家の指導により農業社会から工業社会へ進むことを主張し、階級闘争を出発点とする共産主義に反対する。

注11所掲書の七九頁に「大江社」とあるのは、時期から見ても、この「大江会」と同じものと考えられる。

(16) 「清華八年」『秋室雜憶』(伝記出版社 一九六九 台湾)によれば、「学生会は評議会と幹事会の二つに分れており、評議会は決議機関で、幹事会は執行機関であり、評議員は選挙で選ばれた」とある。

(17) 「清華大学校史稿」(前出)によれば、原名は『清華週報』。一九一四年三月創刊され一九三七年中日戦争勃発により停刊したが、その間一度も休刊したことがなかったという。

(18) 「憶『新月』『秋室雜憶』」(前出)所収による。第二卷第二期～五期の編集者は、梁実秋、葉公超、潘光旦、饒孟侃、徐志摩の五人の名前が奥付に明記されている。

(19) 「清華八年」(前出)による。

(20) 『学衡』に発表されたバビッドの論文の訳や人文主義に関する紹介は次の如し。

① 胡先驕訳「白璧德中西人文教育談」第三期一九二・三

梁実秋と人文主義

- ② 梅光迪「現今西洋人文主義」第八期一九二二・八
③ 吳宓訳「白璧徳之人文主義」第十九期一九二三・七
④ 吳宓訳「白璧徳論民治与領袖」第三十二期一九二四・八
⑤ 徐震堉訳「白璧徳釈人文主義」第三十四期一九二四・十
⑥ 吳宓訳「白璧徳論欧亜兩州文化」第三十八期一九二五・二
⑦ 吳宓訳「白璧徳論今後詩之趨勢」第七十二期一九二九・十一
⑧ 張蔭麟訳「白璧徳論班達与法国思想」第七十四期一九三一・三
- (21) 梁実秋氏から筆者宛の書信（一九八二・一・十一及び一・三十一）によれば、原稿がこのような長期にわたって編集部にかせられることは当時よくあった事らしい。この場合も氏の原稿提出が早過ぎて、他の原稿が揃わなかったため、編集部が故意にしたことではないという。

(22) Irving Babbitt (1865~1933) 主著に次のようなものがある。

- ① "Literature and American College" 1903
② "New Law Laokoon" 1910
③ "The Masters of French Criticism" 1912
④ "Rousseau and Romanticism" 1919
⑤ "Democracy and Leadership" 1924

(23) ニュー・ヒューマニズ運動とは、「アメリカの批評」2、ネオ・ヒューマニスト運動（福原麟太郎・西川正身・小酒井益蔵監修『英米文学史講座』第十巻 研究社出版 昭和三五・一二・所収）によれば、「ルネッサンス・ヒューマニズムが中世神学の横暴な支配から人間性を救出する目的で、古典文学の合理的研究を主張する運動であったのに対し、同じことをこんどは、近代科学および近代実証主義の横暴から人間性を救出する目的で行なうとする」ものであった。

- (24) (25)、(23) 引く書に拠る。
- (26) (22) ①、の邦訳は長谷川誠也著『文芸思潮論』（博文館出版 一九二九）の附録「人道主義派の二典型」による。
- (27) (26) に引く「人道主義派の二典型」二九一ページによる。
- (28) △現代▽第五卷第六期 現代美国文学専号 一九三四・十・一
- (29) (22) の②、邦訳では長谷川誠也著『文芸思潮論』（『ニュー・ラオコオン』の増補自由訳 博文館 一九二九・二）
- (30) Word-painting, Word-picture の訳、絵を見るような叙述または文章の意。
- (31) Program music の訳。器楽演奏により、出来事、光景、気分などの一定の筋書を絵画的印象を与えるように表現する音楽。
- (32) 音を色彩によって表わす試み。
- (33) 「関於白璧德先生及其思想」『文学因縁』（文星書店 一九六四）所収。
- (34) △晨報副鐫▽一九二六・二・十五執筆。
- (35) 「関於魯迅」『文学因縁』（前出）所収）では、魯迅は恐らく同情心から被圧迫民族の文学を翻訳したと述べる。
- (36) 壁華編『魯迅与梁実秋論戰文選』（天地圖書有限公司 一九七九 香港）の一一ページ。
- (37) △復旦週刊▽創刊号 一九二七・十一に発表されたという。
- (38) 魯迅著『而已集』所収
- (39) 「憶『新月』」（前出）六九ページ
- (40) 新村徹「『新月』派と魯迅（上）」△中国文学論叢▽第七号 桜美林大学 一九七九・三
- (41) 「憶『新月』」（前出）七一ページによれば、「私は新月でプロ文学運動を批判したが、ロマンチックな頹廢的傾向を攻撃するものも忘れなかった」として、「文人有行」と郁達夫をあげている。
- (42) 梁実秋の筆者宛の書信（一九八二・一・三十一）では、「所謂革命文学とは、その基本的出発点はまことにロマンティックなものであった。それ故、私はすべてのロマンティックな表出にはみな批判を加えた。革命文学もそれに含まれている」と述

べているのを紹介しておく。

(43) 丸山昇著『魯迅と革命文学』紀伊国屋新書 一九七二・一

(44) 細入藤太郎「アメリカの批評」(川崎寿彦編『講座英米文学史』第十二卷 大修館 一九七二・十二) 所収

(45) (10) に引いた倪墨炎、白燁の論文に見られる、

(46) 劉心武「如意」(《十月》一九八〇年第三期 北京出版社 一九八〇・五)

附記Ⅰ：注(6)にあげた趙家璧の文中に、台湾の文学史家劉心皇著『徐志摩与陸小曼』から引いた梁実秋の『談徐志摩』の一節及び『徐志摩全集』(伝記文学出版社 一九六九 台湾)に梁実秋が書いた「編輯經過」が引用されていることから、中国では梁実秋はじめ台湾在住の文学者とその文学についての見なおしが、従来とは異った角度から進められている気配が感じられる。

附記Ⅱ：筆者は一九八二年三月十四日台北のマンションに梁実秋氏を訪問し、いくつかの質問をする機会を得た。その中で「現代文学之浪漫的趨勢」の(口)の②に関しては、梁氏自身はその批判の対象を魯迅、周作人よりも、むしろ茅盾、鄭振鐸ら文学研究会に向けていたことを知り得た。筆者自身もそれを考慮しなかったわけではないが、魯迅、周作人共訳の『域外小説集』(一九〇九)及び魯迅の「狂人日記」(一九一八)、またのちの魯迅との論争などから、文学研究会よりもやや遅れて発足した語絲社の方が強くイメージされたため、本文のような記述になった。しかし、《小説月報》は茅盾らの編集に移って面目一新され、とくに「海外文壇消息」欄を設け弱小・被圧迫民族の文学を精力的に翻訳・紹介したことは注目すべきことである。なかでも、第十二卷十期(一九二一・十・十)は「被損害民族的文学号」の特集を組んでいることなどから、梁氏の指摘は当然と言える。他にもいくつか示唆を受け調べなおした点もあるが、それらを述べる紙幅はない。機会があれば稿を改めて論じたい。大方の御叱正を期待する次第である。(一九八二・四・